

札幌サステナビリティ宣言 G8大学サミット

実施記録



北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局
2017年3月



本書について

本書は、2008年に北海道大学が中心となり開催した、「G8（主要8ヵ国）大学サミット」およびそこで採択された「札幌サステナビリティ宣言」に関する実施記録です。主に、ウェブサイトをもそのままPDF化して集約しています。

当時の担当者の熱い想いを可能な限り記録に残すことに努めました。よって、サミット開催当時の2008年時点の情報のため、掲載しているウェブサイトURLがリンク切れしていたり、無効な連絡先を掲載している場合があります。

また、本書は日本語の記録ですが、より詳細を英語でも公開していると共に、他年度の持続可能な社会の実現に向けた研究・教育の促進強化イベント「サステナビリティ・ウィーク」等の年次記録も両言語で公開していますので、是非ご覧ください。

最後に、当時の開催イベントに関するお問い合わせについては、詳細をお答えするのが難しいこと、予めご了承ください。持続可能な社会の実現に向けて、本書をお役立て頂ければ幸いです。

2017年3月

北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局

目 次

1. 札幌サステイナビリティ宣言の概要

1.1 札幌サステイナビリティ宣言	2
1.2 グローバル・サステイナビリティと大学の役割.....	9
1.3 開催趣旨	11

2. G8 大学サミットの報告

2.1 G8 大学サミット開催結果について	14
2.1.1 開催趣旨	14
2.1.2 参加大学等	14
2.1.3 会議の概要と結果	16
2.1.4 開催日・場所	18
2.1.5 運営体制.....	18
2.1.6 札幌サステイナビリティ宣言の概要.....	18
2.1.7 今後の対応	19
2.2 開催風景	21
1. ウェルカムパーティー.....	21
2. 開会式	24
3. 分科会 A	27
4. 分科会 B	30
5. 運営会議主催レセプション	32
6. 全体会議	33
7. 閉会式	34
8. 記者会見	34
9. フェアウェルランチ	36
10. エクスカーション	37
2.3 運営会議・実施組織	
2.3.1 運営会議 実施組織図	39
2.3.2 運営会議委員名簿	40

2.4	参加大学	
2.4.1	参加大学 国内	41
2.4.2	参加大学 国外	42
2.5	会議日程詳細	43
2.6	報道記録	44

1. 札幌サステイナビリティ宣言の概要

札幌サステナビリティ宣言

2008年7月1日

G8 University Presidents Summit

「札幌サステナビリティ宣言(Sapporo Sustainability Declaration(SSD))」(仮訳)

G8メンバー国内にある代表的な研究・教育機関である27大学の、総長、学長、塾長および代表者らは、大学や科学者に期待される役割の拡大を重大に受け止め、2008年7月に日本国北海道の洞爺湖において開催されるG8首脳会議の直前の6月29日から7月1日に、同じ北海道の札幌で開催した「G8大学サミット」に集結し、サステナビリティの実現のために大学が果たすべき責務とそれらを達成するための具体的な取組みについて議論した。また、会議には、G8メンバー国以外の主要国から6カ国の8大学及び国連大学が招待された。

G8大学サミットに出席した全大学の学長は、世界のすべての大学が本宣言に賛同し、それぞれの国や地域の状況に配慮しつつ、適切な行動に移すことを期待する。

1. サステナビリティ実現に向けた共通の認識と行動

我々、G8大学サミットに出席した全大学の学長は、サステナビリティ実現に向けた地球規模での取組みにおける大学の役割ととるべき行動に関して、以下の認識を共有した。

1. サステナビリティの重要性

人間、社会、グローバルレベルでの持続可能性(サステナビリティ)の考え方は21世紀における最も重要な概念の一つである。過去の一連の会議や宣言文は、今後のサステナビリティに向けての重要な指針となる(参考資料参照)。一方で、今日では科学と政策との距離が著しく縮まってきた。

2. サステナビリティの問題が政治課題に

かつては科学の問題とされてきた気候変動を含むサステナビリティにかかわる問題は、今や最大の政治課題となっている。貧困撲滅や開発問題のような喫緊の社会問題に加え、気候変動は、人間、社会、そして地球のサステナビリティに多岐にわたる影響を及ぼす。今日、我々人類が喫緊の直面する地球環境の問題は、これまで人類の歴史の中で遭遇し乗り越えてきたどの問題よりも、複雑で広範にわたり、大きな不確実性を伴っている。しかも、我々に与えられている時間は多くない。

3. 大学の責任

すべての大学は、次世代に持続可能な地球と社会を残すため、問題解決に重要な役割を担っており、そのために、研究を通じ、時宜にかなった解決策を提示していくことが期待される。また、これら解決策が、適時適切に政策として結実するためには、政策決定者と研究者がより密接に連携することが求められている。しかしながら、より重要なのは、この大学が果たすべき役割そのものが変わりつつある点である。大学は、中立かつ客観的な存在として、持続可能な社会の形成に

向けて政治と社会を啓発していくのにもっともふさわしい存在である。

さらに、持続可能な社会を形成に向けたこうした解決策を現実的かつ的確なものとするためには、大学は、市民や企業など幅広いステークホルダーとも協力していくことが重要である。そして、大学はこの目的に向けて、サステナビリティに関する研究や政策分析の分野で協働していかなければならない。しかし同時に、大学の強みでもある学問的な客観性を犠牲にしてはならない。G8メンバー国における先端的研究を担う大学には、かかる大学の責任を果たすため、特にリーダーシップを発揮していくことが求められる。

4. 新たな科学的知識の構築

サステナビリティの領域は広範であり、自然環境や社会経済システムにかかわる多様な問題が複雑に絡み合っている。サステナビリティの実現には、環境問題の解決という視点だけでなく経済・社会問題も含めた総合的な問題解決のアプローチが必要である。

G8サミットや国連を始めとする国際機関においても、低炭素社会、循環型社会、自然共生社会の構築などサステナビリティをとらえた多様なイニシアティブが展開されている。しかしながら、持続可能な社会の形成に向けた総合的なビジョンを形成するためには、過去の細分化された研究分野を再構築した新たな科学的知識が必要であり、また、学際的研究を推し進め、統合的なアプローチによって問題を解決することが求められている。

5. 連携ネットワークの構築

このように新しい科学的知識体系を構築するには、既存の研究学術分野を超えて、総合的に問題を解決することのできる統合的な枠組みが必要である。こうした観点から、これまで特定の課題毎に構成されてきている既存のさまざまな研究ネットワークを、各々の実績・強みを活かした相互補完的な包括的連携ネットワーク(Network of networks; NNs)として統合化していくことが必要と考えられる。

この包括的連携ネットワークを通じて、異なる地域にあるさまざまな大学間での、学生、教職員の交流や共同研究など、さまざまなレベルでの実効性ある学際的協力をすすめることが可能となる。

6. ナレッジイノベーション(Knowledge Innovation)の推進

サステナビリティの実現には、市民の意識改革を含めた社会改革が伴う。大学とそれに属する研究者は、サステナビリティに関係する新たな科学的知識と情報を、その不確実性も踏まえつつ正しく明確に発信する責務を有する。

科学者と、市民や政策決定者など他のステークホルダーとの対話を通じて、新たな科学的知識は、社会変革を促し、適切な政策の展開を助長する触媒となりうる。一方で、このような対話により、知識そのものの改革もさらに進み、社会がサステナビリティの実現に向けて変革していくことを後押しする。このような社会と知識が相互影響し変革していくダイナミックな現象、すなわちなレッジイノベーション(knowledge innovation)を推進していくことが、サステナビリティの達成には重要である。

7. サステナビリティのための高等教育の役割

将来世代の教育およびサステナビリティについての啓発という意味で大学の担う役割は大きい。とくに問題をグローバルに俯瞰的に見つめ、国や地域の 特有の問題を解決する能力を持つリーダー育成の必要性は高い。とりわけ、グローバルな問題の影響をより大きく受ける途上国のサステナビリティを確保するためには途上国の人的資源の開発が不可欠である。大学は、包括的連携ネットワークに参加し相互協力することにより、それぞれの国や地域での高等教育を質的 量的に発展させ向上させることができる。

8. 大学が提示する新たなモデル — 実験の場としてのキャンパス

サステナビリティの実現において大学が果たし得るもうひとつの役割は、大学の研究教育プロセスを通じて社会のさまざまなステークホルダーとの交流を行い、サステナブルな社会の新しいモデルとして自らのキャンパスを活用していくことにある。

大学は、自らが持つサステナビリティに関連する先端知識を社会と一体になって実験する場としてのキャンパスを有している。かかる意味において、いくつかの参加大学が実施している「サステイナブル」キャンパスあるいは「グリーン」キャンパスや、気候変動対策のための行動声明などは、まさにサステナビリティを目指す社会のモデルとなる。

大学を社会の実験の場にすることは、将来の社会のサステナビリティを担っていく学生たちに必要なスキルや行動様式を育むという点においても重要である。換言すれば、キャンパスは実験の場であると同時に教育の理想的な教材であり、大学はサステナブル・キャンパス等の活動を通して次世代の社会づくりに貢献することができる。

G8大学サミットに集まった参加大学は、いずれも世界各地の代表的存在である。その大学が地域の経済、社会、文化的事情を踏まえてそれぞれに作り出すモデルの集積は、多様性を包含するグローバルモデルの構築につながる。

II. 我々の決意(コミットメント)

以上共有された認識を踏まえ、G8大学サミットに出席した全大学の学長たちは、以下のとおり約束する。

- a. 我々は、21世紀における科学的知識が政策と社会を支えていくことの必要性を十分に認識し、政策と社会とアカデミアがサステナビリティ実現のために共進していく原動力として、大学の新しい使命を果たしていく。
- b. 政策との連携が可能な知識の創出に総力を挙げて取り組む。
- c. 我々は、複雑かつ広範なサステナビリティの課題に対応するべくNNsの形成のために、その目的や内容についての共通認識の形成や研究ネットワークによる会議の開催等を含む、行動計画策定の実施を約束する。
- d. 我々は、NNsを科学のプラットフォームとして活用しつつ、共同研究と教育プログラムを通じて開発途上国の大学・研究機関と連携を強化し、必要に応じた支援をしていく。
- e. 我々は、前述の目的を達成するために必要な組織・体制を整備し、予算を確保する。

- f. 我々は、サステナビリティの実現に向けて、地域とともに、キャンパスを用いて新しい社会モデルを実験する役割を担う。
- g. 我々は、上記のコミットメントについて、他の大学に対し、認識を共有し、共に行動することを呼びかける。

III. G8首脳への要請

この機会に、とりわけ気候変動を含む喫緊の地球規模の問題への討議に関し、我々（G8大学サミットに出席したG8メンバー国の大学学長）は、G8首脳に対し、サステナビリティに関する研究と教育に携わる大学人として、以下のとおり要請する。国連大学およびG8メンバー国以外の大学の出席学長はこれを支持する。

- a. サステナビリティのためのナレッジイノベーションや包括的連携ネットワーク（Network of networks）などに関する大学の取組みに関し理解し、支持すること。
- b. サステナビリティに関連する政策の立案、実施等にあたり、大学とのパートナーシップを深めること。
- c. 低炭素社会、循環型社会、自然共生社会の形成に向けた統合的なアプローチを含むサステナビリティの課題に関し、科学の成果を正しく認識し、適切に国民に周知し、問題解決のために科学的に正当性のある政策を進めること。
- d. とりわけ、切迫した課題として洞爺湖サミットで中心的議題となる気候変動対策に関し、国際社会が早急に適切な枠組みを採用し、科学的に適切な対応策を実施するようリーダーシップを発揮すること。
- e. 急速に深刻化している食料とエネルギー問題に象徴されるように、グローバルな問題は相互に関連していることを認識し、またそれらの問題は、今後も続く気候変動によって悪化していくことを理解した上で、科学的研究の成果と知識を尊重しつつ、これら課題に総体的に対応する政策を他国との協調体制の下に早急に実現すること。

以上

我々学長は、サステナビリティ実現に向けて大学が果たすべき重要な役割を認識し、本宣言文に記された大学のコミットメントを確認し、G8首脳と国際社会に対しとるべき行動を提案し、働きかけることをここに宣言する。

（以下、G8メンバー国大学学長による署名）

(signed)	(signed)
Stephen J. Toope, President and Vice-Chancellor The University of British Columbia	Indira V. Samarasekera President and Vice-Chancellor University of Alberta
(signed)	(signed)
Xavier Michel, President Ecole Polytechnique	Georges Molinié, President Université Paris-Sorbonne (Paris IV)
(signed)	(signed)
Bernd Huber, President LMU Munich	Burkhard Rauhut, Rector RWTH Aachen University
(signed)	(signed)
Francesco Profumo, Rector Politecnico di Torino	Guido Chelazzi, Vice-Rector Università degli Studi di Firenze
(signed)	(signed)
Eiji Hatta, President Doshisha University	Takehiko Sugiyama, President Hitotsubashi University
(signed)	(signed)
Hiroshi Saeki, President Hokkaido University	Yuichiro Anzai, President Keio University
(signed)	(signed)
Kazuo Oike, President Kyoto University	Tisato Kajiyama, President Kyushu University
(signed)	(signed)
Shin-ichi Hirano, President Nagoya University	Kiyokazu Washida, President Osaka University
(signed)	(signed)
Kiyofumi Kawaguchi, President Ritsumeikan University	Hiroshi Komiyama, President The University of Tokyo
(signed)	(signed)
Akihisa Inoue, President Tohoku University	Kenichi Iga, President Tokyo Institute of Technology
(signed)	(signed)
Jun-ichi Nishizawa, President Tokyo Metropolitan University	Katsuhiko Shirai, President Waseda University
(signed)	
Vladimir Kurilov, President Far Eastern National University	
(signed)	(signed)
Mary Ritter, Pro-Rector Imperial College London	Peter Guthrie, Director, Centre of Engineering for Sustainable Development The University of Cambridge

(signed)	(signed)
Gene D. Block, Chancellor University of California, Los Angeles	Donald Filer Director, the Office of International Affairs Yale University

我々学長は、サステナビリティ実現に向けて大学が果たすべき重要な役割を認識し、本宣言文に記された大学のコミットメントを確認し、G8メンバー国の大学によるG8首脳と国際社会への提案をここに支持する。

(以下、G8メンバー国以外の主要国から6カ国の7大学及び国連大学の学長による署名)

(signed)	(signed)
Ian Chubb, Vice-Chancellor and President The Australian National University	Carlos Clemente Cerri, Professor Center of Nuclear Energy in Agriculture University of São Paulo
(signed)	(signed)
Jianhua Lin Executive Vice-President and Provost Peking University	Weihe Xie, Vice President Tsinghua University, Beijing
(signed)	(signed)
Kripa Shanker, Deputy Director Indian Institute of Technology, Kanpur	Jang-Moo Lee, President Seoul National University
(signed)	(signed)
Ihron L Rensburg Vice-Chancellor and Principal University of Johannesburg	Konrad Osterwalder, Rector United Nations University

参考資料：

G8大学サミットの背景

人間、社会、グローバルレベルでの持続可能性(サステナビリティ)の考え方は21世紀における最も重要な概念の一つである。この考え方は、1987年の環境と開発に関する世界委員会(WCED)の報告書「Our Common Future(邦題「我ら共有の未来」)」の中で、今後の国際社会にとって中心的な指針となる考え方として「持続可能な開発」という言葉が取り上げられて以来、

- 1992年に開催された国連環境開発会議で採択された「環境と開発に関するリオ宣言」やその行動計画である「アジェンダ21」
- 2000年に国連ミレニアムサミットで採択された「ミレニアム宣言」にある行動や目標をまとめた「ミレニアム開発目標(MDG)」
- 2002年に開催された持続可能な開発に関する世界首脳会議で採択された「持続可能な開発に関するヨハネスブルグ宣言」と「持続可能な開発に関する世界首脳会議実施計画」

など一連の首脳レベルの国際会議を通じてその達成に向けた真剣かつ幅広い議論が行われてきた。

とりわけ、研究と教育の重要性については1990年の「持続可能な未来のための大学学長会議タロワール宣言」が先駆けとなり、「アジェンダ21」第36章(教育、意識啓発及び訓練の推進)に持続可能な開発の実現における大学の役割が指摘された。

その後、持続可能な開発と大学の役割に関しては数多くの会議で議論され、世界各国の大学学長らが地球環境や人類を脅かす喫緊の問題の解決に大学が寄与していくとコミットしてきた。これらには、たとえば、1993年「持続可能な開発に関する京都宣言」(国際大学協会(IAU))、2001年の「リューネブルグ宣言」(持続可能なパートナーシップのための世界高等教育(GHESP))、2002年の国連大学等による「持続可能な開発のための教育、科学および技術についてのウブント宣言」などがある。また、2002年には、国連総会において2005年から2014年の計画として「国連持続可能な開発のための教育の10年(DESD)」が決議された。

また2006年に開催されたロシアのサンクトペテルブルグにおける主要国(G8)首脳会議では、創造性豊かな人材の育成のための取組みなど革新(innovation)を生み出す社会の実現に向けた具体的方策の必要性が強調された。

これら過去の会議や宣言文は、今後のサステナビリティに向けての重要な指針となる。一方で、今日では科学と政策との距離が著しく縮まってきている。2007年にドイツのハイリゲンダムで行われたG8首脳会議では、気候変動問題について各国首脳が早期かつ強固な行動に出ることをコミットした。

このことは、かつては科学の問題とされてきた気候変動の問題が、今や最大の政治課題となったことを示している。気候変動は、人間、社会、そして地球に多岐にわたる影響を及ぼす。今日、我々人類が喫緊の課題として直面する地球環境の問題は、これまで人類の歴史の中で遭遇し乗り越えてきたどの問題よりも、複雑で広範にわたり、大きな不確実性を伴っている。しかも、我々に与えられている時間は多くない。

問題の把握と解決方法の模索には、従来以上に科学の果たすべき役割が重要となっていることは「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」の例からも明らかである。そしてこのことは、研究機関や大学には、サステナビリティのための教育はもとより、的確かつ効果的な政策を打ち出すための科学的知識を提供することが求められていることを意味している。

注: 正本は英語版とする。



グローバル・サステナビリティと大学の役割

持続可能な社会を実現するために

気候変動に代表される地球環境問題等人類の生存に係る地球的規模の課題への取り組みには学術分野からの貢献が不可欠です。G8大学サミットでは、地球・社会・人間システムとその相互関係のサステナビリティ※¹⁾を達成するため、また持続可能な開発※²⁾のための教育※³⁾を推進するため、大学間が連携して国際ネットワークを構築することや、新しい科学的知識を構築することを通じて、学術界からの国際貢献を目指します。

このため、G8諸国、G8以外の主要先進国ならびに急速な経済発展を遂げつつある途上国の代表的な学長が集まり、地球的、人類的課題に対していかに挑戦していくべきかを討議し、その成果については、G8首脳は支持を働きかけるとともに、グローバル・サステナビリティの実現に向けた国際的な合意形成プロセスに反映させたいと考えています。

【語句説明】

※1) サステナビリティ=sustainability

持続可能性と訳される。人類の活動が将来に渡って持続することができるかどうか注目した考え方。特に環境や資源、エネルギーの観点から使用され、地球規模に注目した場合、グローバル・サステナビリティと言われる。

※2) 持続可能な開発(SD:Sustainable Development)

環境と開発に関する世界委員会(WCED 1987年)によれば「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」と定義され、環境と開発は不可分の関係にあり、環境を保全していくことが持続的な発展のためには必要不可欠であるという考え方。

※3) 「持続可能な開発のための教育(ESD)」

持続可能な社会の実現に向けて、一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革するための教育(我が国における「ESDの10年」実施計画より)。

持続可能な開発のための世界首脳会議(ヨハネスブルグサミット)の実施計画に基づき、2002年の第57回国連総会において2005年からの10年を「国連持続可能な開発のための教育の10年」とすることが決議され、我が国も2006年3月に「ESDの10年」関係省庁連絡会議により実施計画が策定された。

会議日程

2008
6/29(日)～7/1(火)

実行委員会

下記の3校が実行委員会を運営しております。





G8 大学サミットは北海道洞爺湖サミットを機に、
アカデミアからの提言を行います。

お問い合わせ先

G8 大学サミット準備事務局
〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 5 丁目
北海道大学事務局内
TEL : 011-706-2916, 4797, 4798 / FAX : 011-706-2095

開催主旨

Global Sustainability and the Role of Universities

グローバル・サステナビリティと大学の役割

持続可能な社会を実現するために

背景

近年における人間活動の急速な拡大は、資源・エネルギーの大量消費と廃棄を通じて、気候変動や廃棄物問題に見られるように地球環境に深刻な影響を与えはじめています。こうした人類の生存に係る地球的規模の課題の解決に取り組むには、人間活動が地球・社会・人間システムとその相互関係に破綻をもたらしつつある状況を正しく、統合的に理解し、グローバル・サステナビリティ(持続可能性)の観点からシステムの再構築、およびそれらの相互関係を修復する方策を示し、次世代にも豊かな人間社会を保障するためのビジョンの提示を行う必要があります。

主要先進国首脳会議(G8サミット)は、これまでも地球環境問題の国際的取組みに対して先導的な役割を果たしてきました。特に、2007年7月にドイツで開催されたハイリゲンダム・サミットでは、2050年までに世界の二酸化炭素排出量を半減するという「美しい星50」と題する日本政府の提案や長期的削減に関するEU・カナダの意見が支持され、途上国の参加も含めた新たな国際的枠組みの必要性が協議されました。2008年日本の北海道・洞爺湖で開催されるG8サミットでは、2009年までの合意を目指して、ポスト京都議定書のあり方についてさらに深い議論が期待されます。さらにリデュース、リユース、リサイクルを基本とした3Rイニシアチブについても、国際的な協調の仕組みが議論されることになっています。

目的：学術界からの貢献を目指して—大学間連携と教育—

こうした国際的課題の検討には学術分野からの貢献が不可欠であり、気候変動問題を科学的に評価・予測し大きな成果を納めた気候変動に関する政府間パネル(IPCC)への貢献に見られるように、先端的な研究型大学が果たすべき役割はきわめて大きいことは言うまでもありません。グローバル・サステナビリティの問題は複雑多岐にわたり、サステナブルな地球の実現のためには、既存のディシプリンを横断して学術界がその英知を結集する必要があります。世界の先端的な研究型大学が連携してこの問題に挑戦する新たな枠組みを形成することが、人類と地球にとって今日求められています。とりわけG8諸国はこの面でのリーダーシップが求められており、G8大学サミットでは、地球・社会・人間システムとその相互関係のサステナビリティを達成するための、主要先進国を中心とした大学間連携による学術界からの国際貢献を目指します。

先端的な研究型大学がこうした目的の達成に対して果たすもう一つの重要な役割には教育があります。サステナビリティの実現のためには、21世紀全体を視野に入れた超長期にわたる取組み能力の育成、社会の持続可能な発展に貢献する人材の育成が不可欠だからです。G8諸国や経済成長が著しい中国、インドを含む途上国において持続可能な開発のための教育を推進し、先端的な研究型大学が連携して国際ネットワークを構築することは、ミレニアム開発目標の達成を含む、持続可

成果：アカデミアからの提言

このG8大学サミットでは、日本などのG8諸国において、学术界で先導的な役割を果たしている各国の代表的な大学の代表者を招聘し、上記に述べた地球的、人類的課題に対していかに挑戦していくべきかを討議するものであります。また、地球規模のサステイナビリティを実現するためには、オーストラリア、韓国などのG8以外の主要先進国や急速な経済発展を遂げつつあるブラジル、中国、インド、南アフリカなどの途上国との連携が不可欠であることから、大学サミットではこれらの国々において主導的な役割を担っている大学の代表者にも参加を求め、G8諸国との対話を進めます。

討議の成果については、G8首脳の支持を働きかけるとともに、グローバル・サステイナビリティの実現に向けた国際的な合意形成プロセスに反映させたいと考えています。

2. G8 大学サミットの報告

G8大学サミットの開催結果について

2008年7月1日

2008年7月23日更新

6月29日～7月1日に札幌市で開催されたG8大学サミットは、歴史上初めての試みであり、地球の持続可能性(サステナビリティ)を達成するための調査・研究や教育等大学の役割を認識し、また、大学自らのサステナビリティの達成に向けての取り組みを約束するとともに、G8北海道洞爺湖サミットに参加する首脳たちに対して気候変動問題等に対する科学的で適正な政策の実施を求める「札幌サステナビリティ宣言」を採択しました。

本G8大学サミットは、「グローバル・サステナビリティと大学の役割」をテーマとして、国内の14大学からなるG8大学サミット運営会議(議長 小宮山宏東大総長)が実施主体となり呼びかけたものであり、G8諸国及び非G8主要国の大学並びに国連大学の合計14カ国、35大学の総長・学長など約140名が参加しました。今後もサステナビリティに向けての取り組みを他の大学に広げる努力をするとともに、政策レベルでの対応の促進を図っていくこととしており、次回G8大学サミットが、イタリアで開催することが合意されました。

1. [開催趣旨](#)
2. [参加大学等](#)
3. [会議の概要と結果](#)
4. [開催日・場所](#)
5. [運営体制](#)
6. [札幌サステナビリティ宣言の概要](#)
7. [今後の対応](#) (平成20年7月23日更新)

1 開催趣旨

日本の呼びかけによりG8諸国等の主要大学長等が一堂に会し、国際社会が直面する喫緊の課題について学問的また中立的な立場から議論する枠組みは、歴史上初めての試みです。

G8北海道洞爺湖サミット開催を機に合計14カ国、35大学の学長等(27大学長及び代理8大学)が参集し、地球規模での持続可能性実現のために大学が果たすべき責務とそれらを達成するための具体的な取り組みについて議論し、学术界から国際的な努力を促進し、また、それに対して貢献することを目指して開催されました。

2 参加大学等

G8各国27大学(うち日本14大学)及びその他6か国(中国、韓国、インド、オーストラリア、南アフリカ、ブラジル)7大学並びに国連大学の合計35大学から、約140人が参加しました。

カナダ	ブリティッシュ・コロンビア大学	学長 スティーブン・J・トゥープ
-----	-----------------	------------------

G8 countries		アルバータ大学	学長 インディラ・ヴァサンティ・サマラセケラ
	フランス	エコール・ポリテクニーク	学長 グザヴィエ・ミシェル
		パリ第4＝パリソルボンヌ大学	学長 ジョルジュ・モリエ
	ドイツ	ミュンヘン大学	学長 ベルト・フーバー
		アーヘン工科大学	学長 ブルクハルト・ラウフト
	イタリア	トリノ工科大学	学長 フランチェスコ・プロフォーモ
		フィレンツェ大学	副学長 グイード・ケラッツィ
	日本	同志社大学	学長 八田英二
		一橋大学	学長 杉山武彦
		北海道大学	総長 佐伯浩
		慶應義塾大学	塾長 安西祐一郎
		京都大学	総長 尾池和夫
		九州大学	総長 梶山千里
		名古屋大学	総長 平野眞一
		大阪大学	総長 鷺田清一
		立命館大学	総長 川口清史
		東京大学	総長 小宮山宏
		東北大学	総長 井上明久
		東京工業大学	学長 伊賀健一
		首都大学東京	学長 西澤潤一
		早稲田大学	総長 白井克彦
	ロシア	極東国立総合大学	学長 ウラジミール・クリーロフ
	イギリス	インペリアル・カレッジ・ロンドン	副学長 メアリー・リッター
		ケンブリッジ大学	サステナブル・デベロップメント・センター長 ピーター・ガスリー
	アメリカ	カリフォルニア大学ロサンゼルス校	学長 ジーン・ブロック
		イエール大学	国際部長 ドナルド・ファイラー

other countries	オーストラリア	オーストラリア国立大学	学長 イアン・チャブ
	ブラジル	サンパウロ大学	教授 カルロス・クレメンテ・セリ
	中国	北京大学	副学長 リン・ジエンホア(林建華)
		清華大学	副学長 シェ・ウェイフ(謝維和)
	インド	インド工科大学カンプール校	副学長 シャンカー・クリパ
	韓国	ソウル国立大学	学長 イ・ジャンム(李長茂)
	南アフリカ	ヨハネスブルグ大学	学長 イーロン・L・レンスバーク
		国連大学	学長 コンラッド・オスターヴァルダー

3 会議の概要と結果

メイン・テーマは「グローバル・サステナビリティと大学の役割」であり、「グローバル・サステナビリティを支える新しい科学的知識と国際研究 ネットワーク」(分科会A)及び「グローバル・サステナビリティのためのナレッジ・イノベーション(Knowledge Innovation)と教育」(分科会B)の2つのサブテーマを設けました。

会議の開催に当たっては、福田総理大臣と渡海文部科学大臣からのメッセージが寄せられました。

続いて総会において問題提起が行われ、午後からは上記のサブテーマごとに分科会を開催して、議論を深めました。

会議結果は、1日の総会において「**札幌サステナビリティ宣言**」としてまとめられました。

また、今回合会のフォローアップとして、イタリア大学学長協会(CRUI)から、の提案に基づき、2009年G8首脳サミットがイタリアで開催される機会に第2回G8大学サミットを開催することとなりました。

G8大学サミット会議プログラム

1. 全体日程

2008. 6. 29(日) 19:00－20:30 ウェルカム・パーティー

6. 30(月) 9:00－17:30 会議

19:00－20:30 レセプション

7. 1(火) 9:00－11:30 会議

11:30－12:00 記者会見

12:00－13:30 フェアウェルランチ

2. 会議会場 札幌市(京王プラザホテル札幌)

3. 会議プログラム — テーマ「グローバル・サステナビリティと大学の役割」

6月30日(月)	内容	
9:00-9:40	開会・挨拶・各大学紹介	
9:40-12:00	全体会議 (趣旨説明, 問題提起, 討論)	
13:00-17:30	分科会A	分科会B
	＜サブテーマ＞ グローバル・サステナビリティを支える新しい科学的知識と国際研究ネットワーク - グローバル・サステナビリティに関する「新しい科学的知識 (new scientific knowledge)」 - ネットワークを束ねる「上位」のネットワーク: Network of Networks (NNs) (発表, 討論)	＜サブテーマ＞ グローバル・サステナビリティのためのKnowledge Innovationと教育 - 社会変革の起爆剤 ー Knowledge Innovation - 次世代のグローバル・サステナビリティのために ー 教育 (発表, 討論)
7月1日(火)	内容	
9:00-11:30	全体会議 (各分科会のまとめ発表, 議長サマリー, 討論, 宣言文採択)	
11:30-12:00	記者会見	

参考:

1) サステナビリティ=sustainability

持続可能性と訳される。人類の活動が将来に渡って持続することができるかどうかに注目した考え方。特に環境や資源、エネルギーの観点から使用され、地球規模に注目した場合、グローバル・サステナビリティと言われる。

2) 持続可能な開発 (SD: Sustainable Development)

環境と開発に関する世界委員会 (WCED 1987年) によれば「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」と定義され、環境と開発は不可分の関係にあり、環境を保全していくことが持続的な発展のためには必要不可欠であるという考え方。

3) ナレッジ・イノベーション

ここでは、知識を生み出し共有することによって社会を変えること、そのために知識を構造化することの両者を意味する。これは、「技術革新 (Technology Innovation)」とも共通の意味合いであるが、21世紀の改革は、持続可能性に向けて、技術のみに限らず広く知識全般でのイノベーションが求められていることからナレッジ・イノベーションとしたもの。

4 開催日・場所

平成20年6月29日～7月1日 札幌市(京王プラザホテル札幌)

5 運営体制

小宮山宏東京大学総長が議長、佐伯浩北海道大学総長、安西祐一郎慶應義塾長が副議長に選出されました。佐伯総長と安西塾長は、それぞれ分科会A、Bの議長となった。また、インディラ・ヴァサンティ・サマラセケラ アルバータ大学長(カナダ)とフランチェスコ・プロフォーモトリノ工科大学長(イタリア)が分科会副議長となりました。

6 札幌サステナビリティ宣言の概要

I. 共通の認識

G8大学サミットに出席した、G8 諸国の大学の学長及びその他の主要国から参加した学長たちは、地球規模での持続可能性と大学との関わりに関し、以下の認識を共有しました。

1. 21世紀におけるグローバルレベルでの持続可能性(サステナビリティ)の重要性
2. サステナビリティの問題は今や最も重要な政治課題
3. サステナビリティの課題解決に向けて拡大しつつある大学の責任
4. 科学的知識の再構築の必要性
5. 個別の研究ネットワークを束ねるネットワーク・オブ・ネットワークス(NNs)の必要性
6. 知識と社会双方に変革をもたらすナレッジ・イノベーション(Knowledge Innovation)の必要性
7. サステナビリティ実現に向けた高等教育の役割
8. 社会の実験的モデルとしての大学キャンパスの機能の重要性

II. 我々の決意(コミットメント)

以上の認識を踏まえ、本サミット出席大学の学長たちは以下のとおり約束します。

- 21世紀において、科学的知識が政策と社会を方向付けすることを認識し、政策と社会、アカデミアがサステナビリティ実現のために共に変革していく原動力となるべく、大学の新しい使命を果たしていきます。
- 持続可能性に関する課題に対応するNNsの実現に向け、行動計画を策定します。
- NNsを活用しつつ、共同研究と教育を通じて開発途上国の研究機関との連携、支援を強化します。
- これらに必要な組織・体制整備、予算確保等に努めます。
- 大学キャンパスをサステナビリティの実現に向けての実験の場として、社会とともに次世代モデルの創造に従事します。
- 上記コミットメントに関し認識を共有し共に行動することを、他の大学に対して呼びかけます。

III. G8首脳への要請

G8諸国の大学の出席学長たちは、G8首脳に対し、サステナビリティに関する研究と教育に携わる大学人として、以下のとおり要請する。国連大学およびG8メンバー国以外の大学の出席学長はこれを支持します。

- ・ ナレッジ・イノベーション、NNsなど大学の取り組みを理解し、支援すること。
- ・ サステナビリティ実現に向けた政策の立案、実施にあたり、大学との連携を深めること。
- ・ 低炭素社会、資源循環型社会、自然共生社会の達成等持続可能性のための課題に関する科学的知識を正しく認識し、国民に周知し、科学的に正当性のある政策を進めること。
- ・ とりわけG8北海道洞爺湖サミットで中心的議題となる気候変動対策に関し、国際社会が早急に科学的に適切な政策を実施し、行動を開始するようリーダーシップを発揮すること。
- ・ 食料問題とエネルギー危機のように、グローバルな問題は相互に関連していること、気候変動によって一層悪化していくことを認識し、科学研究の成果と知識を踏まえて、これら問題を総体的に解決するための政策を各国の協力体制の下に早急を実現すること。

7 今後の対応 (平成20年7月23日更新)

2008年7月4日(金)に小宮山東京大学総長、佐伯北海道大学総長、安西慶應義塾長、フランチェスコ・プロフーモトリノ工科大学長、グザヴィエ・ミシェル エコール・ポリテクニック学長およびエマニュエラ・ステファニ イタリア大学学長協会事務局長が首相官邸を訪問し、宣言の手交及びG8大学 サミットの報告を行いました。



この際、代表者一行は、G8大学サミットへのメッセージを同首相からいただいたことのお礼を述べると共に、次回大学サミット開催地がイタリアになったこと、トリノ工科大学とイタリア大学学長協会が中心に準備を進める旨紹介しました。また、省エネへの取り組みの大切さ、国民への「サステイナビリティ」への普及及び子供たちへの環境教育などについて話し合われた後、一行は今後とも大学への支援をお願いしたい旨、首相に要請しました。

このようにG8首脳にG8大学サミットの成果の支持を働きかけるとともに、G8首脳サミット等における地球温暖化問題の議論等グローバル・サステイナビリティの実現に向けた国際的な合意形成プロセスに反映されるよう今後とも努力を続ける予定です。

問い合わせ先：G8大学サミット実行委員会事務局

北海道大学国際企画課長 川野辺 創 011-706-3610

東京大学国際企画グループ長 清水 宣彦 03-5841-2090

慶應義塾大学国際連携推進室事務長 隅田 英子 03-5427-1899

開催風景

G8大学サミット：（於：札幌、開催期間：2008年6月29日～7月1日）

G8大学サミットは、文部科学省の委託を受け、札幌に於いて2008年6月29日～7月1日の間、国内14大学からなる運営会議主催の元、G8諸国 から27の大学長（及びその代表者）、国連大学、非G8諸国から7大学の大学長（及びその代表者）の参加を受けて開催されました。

参加大学、会議概要及び結果、サステナビリティ宣言概要につきましては、G8大学サミット開催結果をご覧ください。

- 1. ウェルカムパーティー 6月29日 京王プラザホテル
- 2. 開会式
- 3. 分科会A 6月30日、13時から17時半まで
- 4. 分科会B 6月30日、13時から17時半まで
- 5. 運営会議主催レセプション
- 6. 全体会議：2008年7月1日 9時～11時30分
- 7. 閉会式
- 8. 記者会見
- 9. フェアウェルランチ
- 10. エクスカーション

1. ウェルカムパーティー 6月29日 京王プラザホテル

実行委員会副委員長である本堂武夫北海道大学理事の司会により、参加者同士の交友を深めるため、北海道大学と北海道洞爺湖サミット道民会議共催のウェルカムパーティーが開催されました。



司会の本堂理事



全体の様子

まず主催者挨拶として、運営会議副議長、実行委員会委員長である佐伯浩北海道大学総長から挨拶の後、北海道洞爺湖サミット道民会議会長である高橋はるみ北海道知事からの開催にあたってのメッセージを嵐田昇北海道副知事が代読しました。



佐伯北海道大学総長



嵐田北海道副知事

続いて、文部科学省渡海紀三朗大臣から来賓のご挨拶をいただき、北海道洞爺湖サミット道民会議副会長である高向巖北海道商工会議所連合会会頭より乾杯の発声がありました。



渡海文部科学大臣



高向北海道商工会議所連合会会頭

しばらくの歓談の後、北海道洞爺湖サミット道民会議副会長である上田文雄札幌市長、運営会議議長である小宮山宏東京大学総長よりスピーチがありました。



上田札幌市長



小宮山東京大学総長

会議で使用するエコバッグが帝人株式会社近藤文男秘書室長より運営会議副議長、実行委員会委員長佐伯浩北海道大学総長に贈呈されました。



写真左、帝人(株)近藤秘書室長;写真右、佐伯北海道大学総長

運営会議副議長である安西祐一郎慶應義塾長の乾杯により、ウエルカムパーティーは終了しました。



安西慶應義塾長

2. 開会式：2008年6月30日 9時～12時

G8大学サミットは京王プラザホテルに於いて平成20年6月30日に開会されました。

開会式では、小宮山宏東京大学総長がG8大学サミット運営会議議長として開会の挨拶をしたのち、福田康夫内閣総理大臣および文部科学省渡海紀三朗文部科学大臣より、G8大学サミット開催に向けてのメッセージを拝受いたしました。



参加者の紹介後、本会の全体会議議長、副議長および分科会議長副議長が以下の通り承認されました。

- 全体会議議長： ● 小宮山東京大学総長
- 全体会議副議長 ● 佐伯北海道大学総長
安西慶應義塾長
- 分科会議長 ● A: 佐伯北海道大学総長、
 B: 安西慶應義塾長
- 分科会副議長 ● A: サマラセケラ アルバータ大学長(カナダ)
 B: プロフォーモトリノ工科大学長(イタリア)

全体会議及び分科会議長より、それぞれについての趣旨説明を行いました。



東京大学・小宮山宏総長



北海道大学・佐伯浩総長



慶應義塾・安西祐一郎塾長



引き続きPlenary Sessionが開催され、5大学の学長(九州大学、ブリティッシュコロンビア大学(カナダ)、エコールポリテクニーク(フランス)、ミュンヘン大学(ドイツ)、極東国立総合大学(ロシア))より講演がありました。



九州大学・梶山千里総長



ブリティッシュコロンビア大学・
スティーブン・J・トゥーブ学長(カナダ)



エコールポリテクニック・
グザヴィエ・ミシェル学長(フランス)



ミュンヘン大学・
ベルント・フーバー学長(ドイツ)



極東国立総合大学・
ウラジミール・クリーロフ学長(ロシア)

3. 分科会A 6月30日、13時から17時半まで

テーマ: グローバル・サステナビリティを支える新しい科学的知識と国際研究ネットワーク

サブテーマ: ・グローバル・サステナビリティに関する「新しい科学的知識(New scientific knowledge)」

・「ネットワークを束ねる上位」のネットワーク: Network of Networks(NNs)

分科会Aでは、議長(北海道大学佐伯総長)、副議長(アルバータ大学サマレセケラ学長)のもと、「グローバル・サステナビリティを支える新しい科学的知識と国際研究ネットワーク」をテーマに以下の大学の発表、それに対するコメント、質疑応答が行われました。



分科会では、前半後半にわかれて、以下計10大学からの発表がありました。



一橋大学・
杉山武彦学長



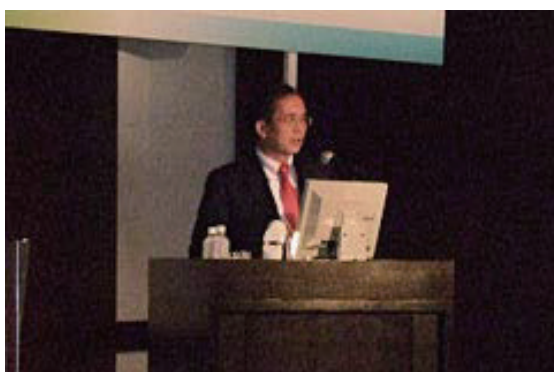
フィレンツェ大学・
グイード・ケラッツィ副学長



ケンブリッジ大学・
ピーター・ガスリー・サステナブル・
デベロップメント・センター長



イエール大学・
ドナルド・ファイラー国際部長



北京大学・
林建華副学長



首都大学東京・
西澤潤一学長



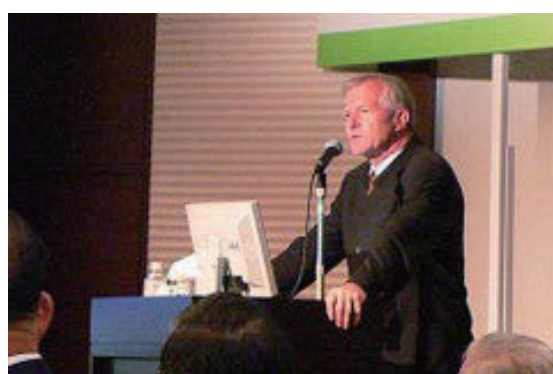
インド工科大学カンプール校・
シャンカー・クリパ副学長



ソウル国立大学・
李長茂学長



ヨハネスブルク大学・
イーロン・L・レンスバーク学長

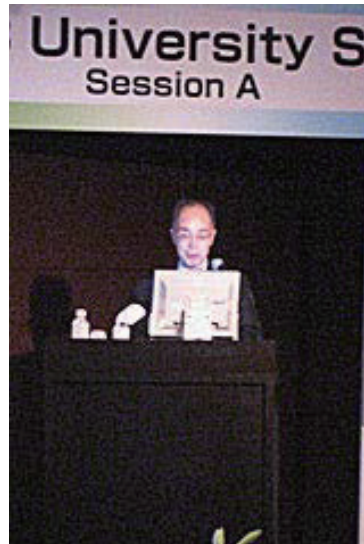


アーヘン工科大学・
ブルクハルト・ラウフォート学長

発表に引き続き以下の3大学からコメントがありました。



東北大学・井上明久総長



東京工業大学・伊賀健一学長



立命館大学・川口清史総長

4. 分科会B 6月30日、13時から17時半まで

テーマ: グローバル・サステナビリティのためのKnowledge Innovationと教育

サブテーマ: ・社会変革の起爆剤－Knowledge Innovation

・次世代のグローバル・サステナビリティの ために－教育

分科会Bでは、議長（慶應義塾安西塾長）、副議長（トリノ工科大学プロフーモ学長）のもと、「グローバル・サステナビリティのためのKnowledge Innovationと教育」をテーマに以下の大学の発表、それに対するコメント、質疑応答が行われました。



分科会では、前半後半にわかれて、以下計8大学からの発表がありました。



京都大学・
尾池和夫総長



パリ第4＝パリソルボンヌ大学・
ジョルジュ・モリニエ学長



インペリアル・カレッジ・ロンドン・
メアリー・リッター副学長



カリフォルニア大学ロサンゼルス校・
ジーン・ブロック学長



早稲田大学・
白井克彦・総長



オーストラリア国立大学・
イアン・チャブ学長



サンパウロ大学・
カルロス・クレメンテ・セリ教授



清華大学・
謝維和副学長

発表に引き続き以下の3大学からコメントがありました。



名古屋大学・平野眞一総長



大阪大学・鷲田清一総長



同志社大学・八田英二学長

5. 運営会議主催レセプション

運営会議主催のレセプションがJRタワーホテル日航札幌36階のスカイバンケットルーム「TAIYOU」にて開催されました。

実行委員会副委員長である浅島誠東京大学理事の司会により、運営会議議長小宮山宏東京大学総長からの挨拶の後、木曾功文部科学省国際課国際統括官からの来賓挨拶、運営会議副議長の安西祐一郎慶應義塾長より乾杯の挨拶がありました。

しばらくの歓談の後、日本文化紹介として箏の演奏がありました。箏演奏にあたっては、北海道国際婦人交流会員（有川秀朋さん）とその師匠である生田流小山弘秀さんの協力により六段の調べが演奏されました。



小山さん、有川さんによる箏の演奏と
それを聞く参加者たち



運営会議副議長である佐伯浩北海道大学総長の乾杯により、レセプションは終了しました。

6. 全体会議: 2008年7月1日 9時～11時30分

前日の分科会での発表、コメント及び話し合いを受けて、全体会議が運営会議議長(東京大学小宮山宏総長)のもと開会されました。



分科会Aの議長(北海道大学佐伯浩)及び副議長(アルバータ大学インディラ・マラセケラ学長)並びに分科会Bの議長(慶應義塾安西祐一郎塾長)及び副議長(トリノ工科大学フランチェスコ・プロフォーモ学長)により各分科会の報告が行われました。



続いて国連大学オスターヴァルダー学長より全体を通してのコメントがありました。

その後、札幌サステナビリティ宣言が採択され、2009年G8首脳サミット開催国のイタリアで第2回G8大学サミットを開催することが合意されました。

7. 閉会式

G8大学サミットは全体会議及び分科会を経て2008年7月1日に成功裏に閉会しました。総会においては、「**札幌サステナビリティ宣言**」がまとめられ、採択されました。



8. 記者会見

引き続き京王プラザホテルにて11時半より、記者会見が行われ、G8大学サミットの開催結果についておよび札幌サステナビリティ宣言概要が公表されました。

参加者: 全体会議議長 小宮山東京大学総長
全体会議副議長・分科会A議長佐伯北海道大学総長
全体会議副議長・分科会B議長安西慶應義塾長
分科会A副議長 サマラセケラ アルバータ大学長
分科会B副議長 プロフーモ トリノ工科大学長





運営会議議長（東京大学小宮山総長）及び実行委員会委員長（北海道大学佐伯総長）より、参加学長へのお礼が述べられた。また、運営会議議長より近日中に首相官邸を訪問し、札幌サステナビリティ宣言を福田総理に手交し、G8大学サミットの報告を行う予定である旨説明がありました。

9. フェアウェルランチ

2日間の会議を終え、実行委員会副委員長である坂本達哉慶應義塾常任理事の司会により、フェアウェルランチが開催されました。

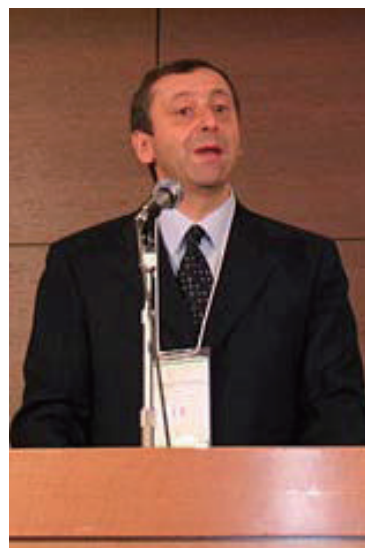
運営会議議長小宮山宏東京大学総長の主催者挨拶に引き続き、久保公人文部科学省高等教育局審議官の挨拶、また、招待大学長代表としてプロフォーモ・トリノ工科大学長のスピーチがありました。



小宮山東京大学総長
（運営会議議長）



久保文部科学省
高等教育局審議官



招待大学長代表
プロフォーモ・トリノ工科大学長



今回G8大学サミット開催にあたり、
ホストをつとめた3大学長
左より安西慶應義塾長（運営会議
副議長）、小宮山東京大学総長（運
営会議議長）、佐伯北海道大学総
長（運営会議副議長、実行委員会
委員長）

10. エクスカーション

エクスカーション（環境対策先進地区視察）として、参加者は、北海道大学博物館、大倉山、モエレ沼を見学しました。

まず、北海道大学では、博物館を見学し、2008年G8北海道洞爺湖サミット関連企画展示である「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」を中心に見学を行い、自然環境の保全と両立を目指し持続可能な社会をいかに作り上げるかなどについて考えるきっかけとなりました。



博物館を見学し、説明を受ける参加者たち

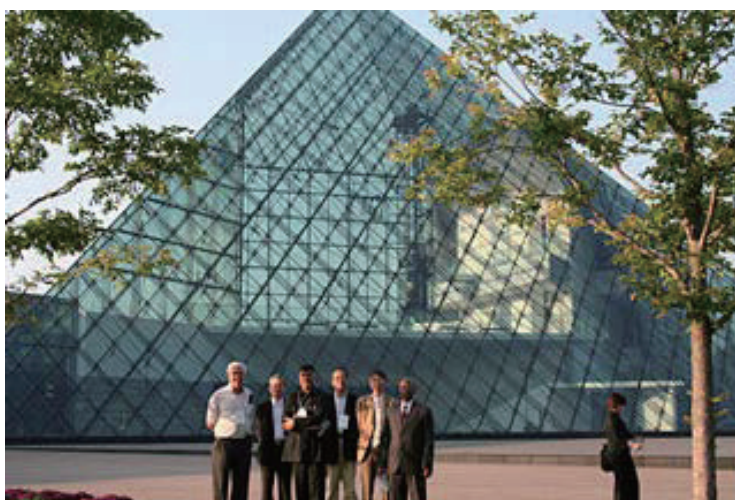
続いて札幌市内を一望できる大倉山を訪問しました。



最後の訪問先として、モエレ沼公園を見学しました。モエレ沼は、ゴミ処理場跡地に公園造成を行い、札幌市の「環境グリーンベルト構想」における北東部の拠点公園として計画された施設であり、公園内の建築物は彫刻家イサム・ノグチによりデザインされました。

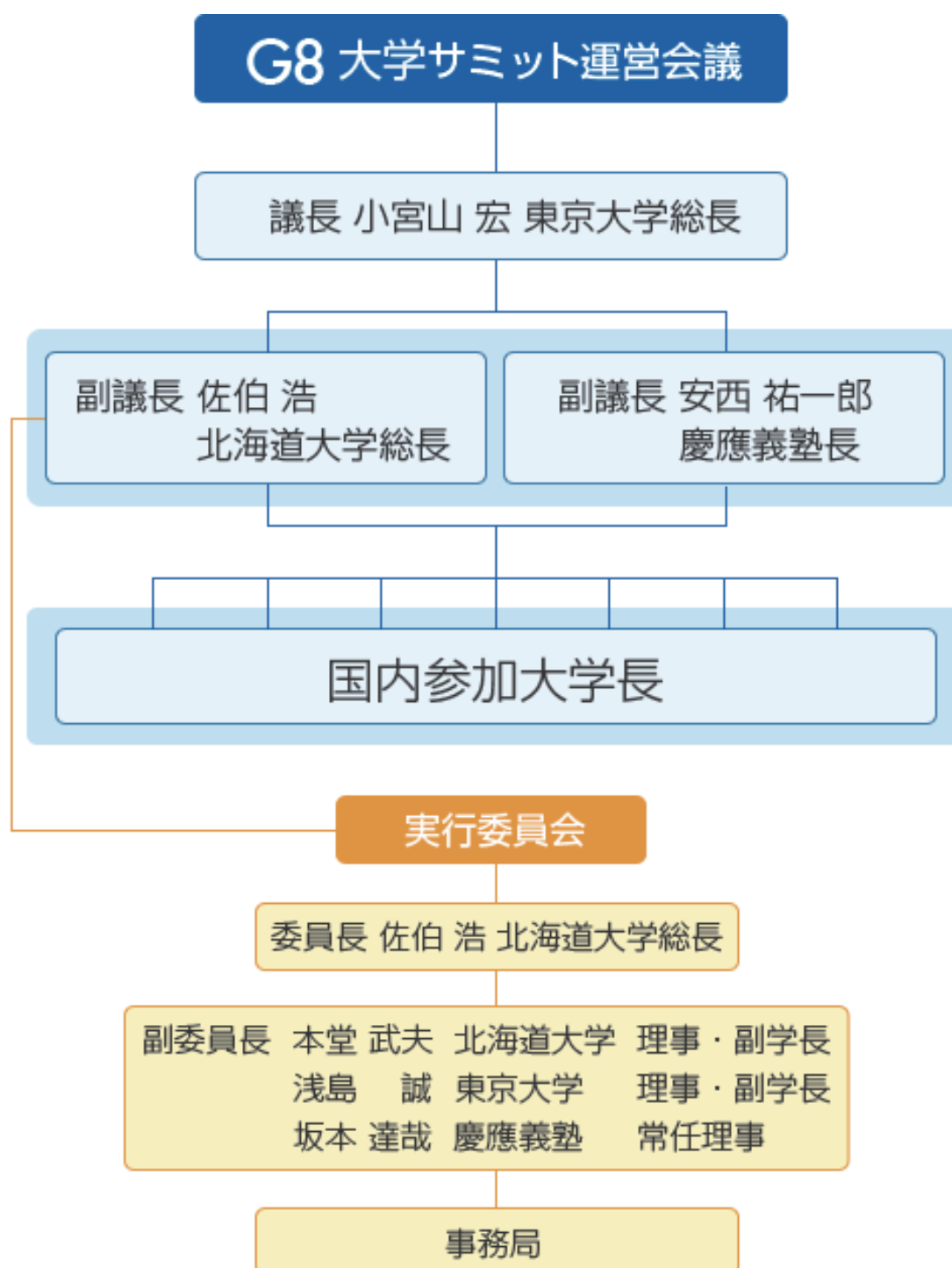


モエレ沼公園では、ガラスのピラミッドHIDAMARI内の会議室において、公園の概要と雪冷房システムについてのビデオと説明を受けた後、実際に雪冷房システムの貯雪庫を見学しました。札幌の積雪量とその雪を運ぶ経費や公園の管理費用など、参加者から多くの質問がありました。



ガラスのピラミッド前にて

運営会議 実施組織図



運営会議委員名簿

佐伯 浩	北海道大学	総長
井上 明久	東北大学	総長
小宮山 宏	東京大学	総長
伊賀 健一	東京工業大学	学長
杉山 武彦	一橋大学	学長
平野 眞一	名古屋大学	総長
尾池 和夫	京都大学	総長
鷺田 清一	大阪大学	総長
梶山 千里	九州大学	総長
西澤 潤一	首都大学東京	学長
安西祐一郎	慶應義塾	塾長
白井 克彦	早稲田大学	総長
八田 英二	同志社大学	学長
川口 清史	立命館大学	総長

参加大学 国内

大学名	URL
北海道大学	http://www.hokudai.ac.jp/
東北大学	http://www.tohoku.ac.jp/japanese/
東京大学	http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html
東京工業大学	http://www.titech.ac.jp/home-j.html
一橋大学	http://www.hit-u.ac.jp/
名古屋大学	http://www.nagoya-u.ac.jp/
京都大学	http://www.kyoto-u.ac.jp/top.htm
大阪大学	http://www.osaka-u.ac.jp/
九州大学	http://www.kyushu-u.ac.jp/
首都大学東京	http://www.tmu.ac.jp/
慶應義塾大学	http://www.keio.ac.jp/index-jp.html
早稲田大学	http://www.waseda.jp/top/index-j.html
同志社大学	http://www.doshisha.ac.jp/japanese/
立命館大学	http://www.ritsumeijp/index_j.html

参加大学 国外

平成20年5月21日現在

	国名	大学名	URL
G 8 国	カナダ	ブリティッシュコロンビア大学	http://www.ubc.ca/
		アルバータ大学	http://www.ualberta.ca/
	フランス	エコール・ポリテクニーク	http://www.polytechnique.edu/
		パリ第4＝パリソルボンヌ大学	http://www.paris-sorbonne.fr/
	ドイツ	ミュンヘン大学	http://www.en.uni-muenchen.de/
		アーヘン工科大学	http://www.rwth-aachen.de/
	イタリア	トリノ工科大学	http://www.polito.it/
		フィレンツェ大学	http://www.unifi.it/
	ロシア	極東国立総合大学	http://www.fenu.ru/
		モスクワ国立大学	http://www.msu.ru/en/
	イギリス	インペリアル・カレッジ・ロンドン	http://www3.imperial.ac.uk/
		ケンブリッジ大学	http://www.cam.ac.uk/
そ の 他	アメリカ	カリフォルニア大学 ロサンゼルス校	http://www.ucla.edu/
		イエール大学	http://www.yale.edu/
	オーストラリア	オーストラリア国立大学	http://www.anu.edu.au/
	ブラジル	サンパウロ大学	http://www4.usp.br/
	中国	北京大学	http://www.pku.edu.cn/ ehomepage.htm
		清華大学	http://www.tsinghua.edu.cn/eng/
	インド	インド工科大学カンプール校	http://www.iitk.ac.in/
		デリー大学	http://www.du.ac.in/
	韓国	ソウル国立大学	http://www.useoul.edu/
	南アフリカ	ヨハネスブルグ大学	http://www.uj.ac.za/
	国際機関	国連大学	http://www.unu.edu/hq/ japanese/index-j.htm

会議日程詳細

日時	内容	
6月29日(日)	ウェルカム・パーティー	
6月30日(月)	開会	
	全体会議 - 各大学紹介 - 趣旨説明 「グローバル・サステイナビリティと大学の役割について」 - 問題提起	
	分科会A	分科会B
	サブテーマ 「グローバル・サステイナビリティを支える新しい科学的知識と国際研究ネットワーク」 - グローバル・サステイナビリティに関する「新しい科学的知識(new scientific knowledge)」 「ネットワークを束ねる上位」のネットワーク : Network of Networks(NNs)	サブテーマ 「グローバル・サステイナビリティのためのナレッジ・イノベーション(Knowledge Innovation)と教育」 - 社会変革の起爆剤ーナレッジ・イノベーション(Knowledge Innovation) - 次世代のグローバル・サステイナビリティのためにー教育
7月1日(火)	レセプション	
	全体会議 - 各分科会のまとめ発表 - 全体コメント	
	宣言文採択・議長総括	
	記者会見	

注)ナレッジ・イノベーション

ここでは、知識を生み出し共有することによって社会を変えること、そのために知識を構造化することの両者を意味する。これは、「技術革新 (Technology Innovation)」とも共通の意味合いであるが、21世紀の改革は、持続可能性に向けて、技術のみに限らず広く知識全般でのイノベーションが求められていることからナレッジ・イノベーションとしたもの。

1) 新聞記事

掲載日	媒体名	掲載見出し
平成19年8月30日	産経新聞朝刊2面	学長サミット初開催 G8合わせ国際交流を促進
平成19年11月10日	朝日新聞32面	G8大学サミット開催へ 札幌で来夏
平成19年11月10日	北海道新聞2面	「大学サミット」札幌開催決定 参加40校前後に
平成20年2月23日	毎日新聞夕刊	世界の名門15校 参加決定
平成20年4月7日	毎日新聞朝刊6面	大学サミット
平成20年4月24日	朝日新聞35面	37大学から参加 温暖化など議論 札幌で6月29日から
平成20年4月24日	北海道新聞28面	札幌で37大学が議論「持続可能な社会」テーマ に宣言採択へ
平成20年6月7日	北海道新聞別刷1面	地球守る英知道都に結集
平成20年6月21日	毎日新聞20面	環境、政治、経済さまざまな視点で
平成20年6月29日	朝日新聞32面	大学サミット 環境宣言を採択へ 14カ国の37校 が参加
平成20年6月30日	読売新聞33面	G8大学サミット 札幌できょう開幕
平成20年6月30日	北海道新聞夕刊1面	世界35大学 持続可能な社会実現に向けて大学の役割を論 議する「G8大学サミット」
平成20年6月30日	毎日新聞夕刊6面	環境問題解決 札幌で大学サミット開幕「知的 コア」に
平成20年7月1日	朝日新聞30面	世界の頭脳、人類の課題議論 大学サミット開 幕
平成20年7月1日	毎日新聞25面 (地方)	大学サミット「国際的な連携を」全体会議 学長 ら問題提起
平成20年7月1日	読売新聞33面 (地方)	知の環境貢献を論議 大学サミット 各校の実践 を紹介
平成20年7月1日	読売新聞33面 (地方)	「持続する社会」へ札幌宣言 G8大学サミット開 幕
平成20年7月2日	毎日新聞夕刊8面	「温暖化対策に科学的行動を」大学サミット宣 言

平成20年7月1日	北海道新聞31面	大学G8閉幕 情報の共有化急務 学術的アプローチを
平成20年7月2日	朝日新聞32面	G8へ要請盛り 札幌宣言を採択 大学サミット閉幕
平成20年7月2日	日本経済新聞43面	札幌で大学サミット閉幕 福田首相に宣言提出へ 環境研究の協力強化を
平成20年7月2日	毎日新聞25面	札幌宣言を首相に要請「サステナ」は重要課題 G8大学サミット閉幕
平成20年7月2日	朝日新聞33面 (地方)	G8大学サミット討議終了し宣言文
平成20年7月5日	読売新聞4面	「永田町フィールドノート にじみ出た首相の思い」(「G8大学サミット」議長らが福田首相と会談、宣言を手渡した)
平成20年7月7日	北海道新聞11面	G8大学サミット(6月30日-7月1日)「科学的知見を政策に」
平成20年7月7日	毎日新聞26面	「行動する大学」契機に G8大学サミット 環境保全へスクラム
平成20年7月7日	週刊文教ニュース 第1991号 6～9頁	歴史上初の「G8大学サミット」札幌で開催
平成20年7月14日	週刊文教ニュース 第1992号 22頁	世界発の「G8大学サミット」成果共有
平成20年7月21日	朝日新聞9面	G8大学サミットが宣言採択 地球のため連携強化
平成20年7月22日	毎日新聞6面 (PRのページ)	政策立案で連携 G8大学サミット 枠組みづくり明記
平成20年7月26日	読売新聞 北海道特集7面	G8大学サミット 温暖化対策に英知結集

2) 記者会見

開催日	会見場所	内容等
平成20年5月21日	The Foreign Correspondent's Club of Japan (FCCJ) 日本外国特派員協会	会見内容の掲載記事 ‘G8 University Summit: Hokkaido, Keio & Tokyo Universities’ Presidents’ http://www.fccj.or.jp/~fccjyod2/node/3454
平成20年7月1日	京王プラザホテル11:30～12:10	「G8大学サミットの開催結果」及び「札幌サステイナビリティ宣言概要」について

作成日：平成 29 年 3 月

作成者：北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局

〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目

TEL 011-706-8031／ E メール contact@oia.hokudai.ac.jp

北海道大学国際部国際企画課

〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目

E メール planning@oia.hokudai.ac.jp
